俳諧合鏡

一名を不遠波のあり屋

完

911.3
ハ

敎雷菴竹友編輯

俳諧合鏡

一名 東遠波の志ほ

[illegible]

俳門書肆 [illegible]堂敎雷

俳諧合鏡序

武藏國入間郡の人久田口竹友子

家君と訪ひけるをきかせもらんとて

ものせられたるハ俳諧の書にて侯

格をとりて世に書なりて人をゆ

そ[illegible]と[illegible]ものあり[illegible]

[illegible]

本居大人の細語をかりて合鏡
[illegible]
[illegible]に一言書[illegible]

布志のやのあるじ

時活十八年秋十月　師墨山亂

序

俳諧の物たるふる昔より人の愛する所なり
其始より次第に人の心を慰さむる
文をもつてする事あり近世紙筆の
こと行はるゝ事あり雖彩毛筆の
十層塔を過ぎて繪画の任
にあるを多く求む俳諧の道

う[illegible]の方よりこと経年えたる歌の
海まで世を宮うの事已の要き
節をも改め整ふるよりて後書
文なれども此度の初学ひ書り欠
面つらきを本形とす

三年春三月都下寺

時年十八年 秋十月

五段活用の動詞

五段活用の動詞

五段活用の動詞は、次の表のように、ア・イ・ウ・エ・オの五段にわたって活用する。

活用形	例	例	例	例	例
未然形	ア	カ	サ	タ	ナ
連用形	イ	キ	シ	チ	ニ
終止形	ウ	ク	ス	ツ	ヌ
連体形	エ	ケ	セ	テ	ネ
已然形	オ	コ	ソ	ト	ノ
命令形	エ	け	せ	て	ね

活用形	例	例	例	例	例
未然形	ハ	マ	ヤ	ラ	ワ
連用形	ヒ	ミ	イ	リ	ヰ
終止形	フ	ム	ユ	ル	ウ
連体形	ヘ	メ	エ	レ	ヱ
已然形	ホ	モ	ヨ	ロ	ヲ
命令形	へ	め	え	れ	え

五段活用の動詞

五段活用の動詞は、次の表のように、ア・イ・ウ・エ・オの五段にわたって活用する。

活用形	例	例	例	例	例
未然形	ア	カ	サ	タ	ナ
連用形	イ	キ	シ	チ	ニ
終止形	ウ	ク	ス	ツ	ヌ
連体形	エ	ケ	セ	テ	ネ
已然形	オ	コ	ソ	ト	ノ
命令形	エ	け	せ	て	ね

活用形	例	例	例	例	例
未然形	ハ	マ	ヤ	ラ	ワ
連用形	ヒ	ミ	イ	リ	ヰ
終止形	フ	ム	ユ	ル	ウ
連体形	ヘ	メ	エ	レ	ヱ
已然形	ホ	モ	ヨ	ロ	ヲ
命令形	へ	め	え	れ	え

廿三段

廿四段

廿五段

廿六段

廿七段

廿八段

廿九段

三十段

卅壱段

卅貳段

卅三段

卅四段

卅五

レル

ケル

ル

ル

ネル

メル

エル

レル

植飢居

ク

ケ

ク

せ

て

ばるい呼ぶて所知所言也

段

廿六段

廿七段

廿八段

廿九段

四十段

四十一段

四十二段

四十三段

俳諧あそび勢鏡 一名てふ吉屋

武藏　田口竹友著

壹段

ハ	ろ	徒	そ

一　き　ゝ　き

山里に万歳近し梅の花　芭蕉

綿入ぬく旅衣かせ　九節

家ごとの木立ゝ　其角

畢竟ものこゝろ　野水

井のもとの柳ちり　半残

水の面の桐の一葉　野子

行燈の雛ゝ　越人

若菜より七草の花　野水

貳段

の	や	何	至
い	も	徒	
そ			

荷兮　許六　芭蕉　凡兆　雨音

芭蕉　沾徳　嵐蘭　羽紅　岱翁　冬松

三段

の	や	何	至
い	も	徒	
そ	の	や	
至			

嵐雪　東流　舜宰　白雄　芭蕉

鮎然　南甫　李史　野童　素秋　芭蕉　梅翁

四段

ハ	も	徒	そ	の	や	何

ふき　ふ

軒半　胡園

菜大根ふとふ　ふきはしりの

梅宇

紙ちらしの面ふきの春時

幾葉

落葉河次郎　むすき小倉山

南南

雛けまそあらるふ　相の花

加丈

波の浮巣芦ひとのとめふ

紗川

船のとも巣や放きふ　迷橋

いしをを河面河ふ　海の上

てき　てし

人九八雲とひてき　兼の時

梅翁

二ツ来く巻も時ちてふひてき

路十

梅ちろ列深ちめてき　二日春

且旭

五段

ハ	も	徒

六段

そ	の	や	何

ハ	も	徒	そ	の

松樹く雪の降きそおひてし

ふちのと人のいひてし　雨ふ雪

風の雪春ちとふ人列きてし

ちそ　ぬ　ね

乗の甲高ちく時　鳴も　せ　ば

ひくふてふ　きのとつちそ　ちそ

何ちの子ちふ　似ち　三日の月

むくき梅ちふ子ちふ　里春朱

蘇やねちふ夢のほちかちそ

ちそ春ちて待ていそ宗ちふ　吋雪

日雪ちも雁の春ちね　猫の哀

松濤　乙州

卓白　智月

嶺順　芭蕉

亂力　曾良

及肩

梅翁

鬼貫

七段

や何　そ　い も徒　そのやの何　そ

芭蕉　曾良　言水

古盆子　秋の暮　懐の紙

芭蕉　丈　吉貞　蓼太　千代　祐甫　宗因

雨桐

八段

ハ　も徒　そのやの何　そ

野牧　立甫　國信　貞和　梅白　和風　鬼重　曾光

九段

ハ　も

柳居　小春

十段

徒　そ　の　や　何　そ　い

物の哀知るものら咲く春の雨　野坡
夕時雨　支考
春雨の降るや花の下の水　芭蕉
振袖の房長き春の風　樗良
咲ぬる梅の香の風　沾徳
春雨の笠ぬぎ捨て鶯の笠　来山
春雨のひとしきりの雨の笠　薫村
鶯の都なる　千代
鶯の声や春の都なる　仙花
春の水人のなきこそ夕なれ　親水
花の春人のなきこそ夕なれ
たるたる
海棠の花に湯たり夜の身　普船

十段

徒　も　そ　の　や　何　そ　い

伊勢の春あるも来たりし代の春　芭蕉
風ふく春過ぎ行くや下の世　松風
春の日を法に入れり宮上川　芭蕉
ちらぬ花ふるの路ぞ春の淋　二水
うつうつとうつぎみ咲る　李桃
ところ貴賤ともに春のまとひ　其角
門を閉し春ふる夜の雨　岱松
職人の惜るきたる夕ぐみ　士芳
あの賀や春よ知せるきりぎす　伏吾
海棠や誰ぞ春ふる程ぞ　曉臺
めでたやとうつぎ咲れ春の人　信尋公
うつる　うつる

い	ゐ	徒		そ	の	や	何	ど

舟泉
嵐雪
太祇
重五
野坡
元北
野径
羽笠
鬼貫
蘭々
き角
宇門

十二段

い	ゐ	徒	そ	の	や	何	ど

めり　めるめき

年の内小春未ぬめり　面の音　豊岳
寶船　複の浦　りかくるり　栗吟
ひとりきぬ宮ひらひらと人まつり　結
花の風　ひまをかまきめる　卑仲
紅葉　枯文　ゆゆ　少ぬめる　滝雪
狗宮　ひとりゆゆ　消雪　宮子の雪　左十
何ひとりきぬ　ひとりる　一ッ琴　喜界
稽　汗の稽ふいてゆるる　當諷

十三段　るる　る　十一段のるるとい異あり
十四段　せり　せる　せ　八段のせりとい異あり
十五段　てり　てる　て

十六段 へり へる へを
十七段 めり める めを 十二段のめりとハ異なり

此五段ハ證句をもつて故を集めて二ツ三ツ八ツ五ツ

い	も	の	や	徒

時雨もつきぬ梅ぬれぬ　芭蕉
家よりとなりの聲とまりけり　都曳
きりぎりすと安らもりて門の松　嵐蘭
蜂入や柳の餅を吹きたり　馬六
時雨落を寄せり小笠越え　園更
三千とせの久しく挑きけり水青　仍船
水若く偃鼠り鬼を洞ぬせり　芭蕉
牛の雪百姿の脱え遊ぬせり　嵐雪
外とせと浦人寄へり春の月　園更

そ	の	や	何	や	そ

十八段

い	も	徒	そ	の	や

花を砕へり初嶽花く刀さそ女　芭蕉
ひとしらや岸の巻紙若むせる　一思
月の〇を猪に走つめる海の底　芭蕉
秀の間の名まとたてきとりつま　琴太
きりまるまる
きをさく神に寄まり花の名　紙順
桐の葉に落てもなほ不変さまり　鬼貫
黒潮の波このまり雪　女　甚角
たそやうり寄そかまる美枫　紙順
春雪の五平賦まるかいけさ　致畫

きる	るる	うる	ぬる	ふる
きき	るき	うき	ぬき	ふき

は　も　そ　の　や　ぞ　も　徒　や

此段ハ證句をあつめ紀故ニ集て一ツにしらせり

雛鶴もうつ穴巣にもちし秋ハ　桂甫

扇にも流らし秋のむさ雲も　朗明

花さそへり紅けハ松楊柳桑かる　葩重

発風馬の扉ぞある　すゞしめ霞の宿　芭蕉

咲も小僧住やぞある　墟之

松の気は句ひ松ぞれ山清水　桐華

家出し庵もなし雨ゐうり　鈍水

捨てちく秒汲みて和哥の浦　可水

むまるる結風にのりてや渡りくる　弓月

を　何　を　何　を　徒　何　を

廿二段

廿三段

廿四段

花の下ゐるとすなはち　梅順

寺をまくハ松源人のあれ　花蝶

水守る鶯や何ぞる蒲の深　年路

月出て道を松うききへき京　重呂

風の月いみ又してぬる音も鳥　梅仲

香の月のうちを松ぬき花の名　信高卿

旅をまくハあさふ月あぶ原の鷲　山亭

いてとせを春雨のふる草の色　梅翁

松にかくくの来てふき花から　梅貞

廿五段ニ合せてあく

卅一段ニ合せて安く

く　うる　うき

廿五段

徒	ハ	何	そ
			夏

叶ふる法師一法ハ聲一つゞく　曦年　越我
なるそつゝく鄰ともたゞむ山の祭　松風
孔雀の傳ふるやゆ神ゝの素とうく　其角
松の上ゆ馬そこゝゝる むらゝの祭
原作や乃そて汐のかゝる　一聲
暁方の聲一や蝉ゝる 鶴鍋　惟然
雅ゝ方の後をかゝる 羊の私　紙順
多根ゝら夜ゝゝゝゝ 雅ゝの声　井順

夏　ゝる　ゝる

近ゝゝ素ゆふゝ山ゝゝら　芳成
山ゝゝゝ矢ゝゝゝゝ 根を素の月　正方
淀川やゝゝふゝゝゝ 水 車　千輪

廿六段

徒	ハ	何	そ
			夏

旅人の雀年ゝゝの ゝゝの ゝけ　千川
ゝゝ風ふ宮朱そ ゝゝる 伊勢の海　波竹
素の花羽ゝゝ 塚の葉ゝゝる　愚然
ゝゝ ゝ 抜や ゝゝる 山の素　木心
石ゝ花ゝゝゝ ゝゝゝ 苔の花　盤経
ゝゝゝゝゝ を ゝゝゝ 素の花　湖鳥
能ゝゝふ ゝゝゝ の ゝ 花の上　桐葉

廿六段ノ一等とハ異あり

つゝる　つゝ

月ハゝゝ原ゝふ抜と素ひゝゝ　専那
ゝゝ素一ゝ原ゝゝ蓮の上　楽山
男ひゝゝ深世の嗟孫の芥子の花　宗因

をのや何　てを　廿七段　ハな徒　をの

竟なりゆりしさゝかを撰まだる　蘿守

木柿の吹志つまも八日のおわりる　南蘿

角落し力やおつる鹿の友　近之

河かけ飛卑して桜のちりまさる　幽窓

緒えんり月をそ出まあしろさ　木尊

ぬぬぬるぬまも　十九段ぬ等とへ興あり

宮俗ハ立出て往ぬ秋の暮　鷺重

山かけ紅きぬる紫蕉ゆり　霞水

えまや室にぬ銀る井　南明

下戸ひとり遊をかねる茶客色　蘿十

極外しし白髪のまぬる秋の風　曽良

や何　てを　廿八段　ハな徒　をのや何　てを

菜の雛の母や見つぬる夕薬　佳山

戸もさそく仏ゑまへのぬる郭公　素心

釈りつる咫まそそぬ主鰯汁　占明

ふふるふま

春の中気しきをのふ年と梅　芭蕉

さかしの道をおすふ年の暮　除風

結ふ糸の帛と糸たのまそとのなる　杭路

菜の花落岸る蝶のあそめつる　雨峰

拝えのう蝦やうそふる七笑菜　濤岩

よるまをいくらなかそふる夏の妖　宮十

昨ふ夫のいろいろそふま春の雨　岳翆

廿九段

む むる むる

い も 徒 そ の や 何

奇嶽 蘭我 芭蕉 月出 類々 寛志 楮良 宗醫

三十段

そ

い も

ゆ ゆる ゆる

其の中に所見に時事の尾 万然 雲の峯世務を徒らに人の事 其明

廿一段

徒 そ の や 何 そ い も 徒 そ の

仙化 梅翁 細坊 曉臺 芭蕉 野紫 湖松 東暎 東順 巴明 木白

世二段

や何　そ　の　や何　そ

い　も　徒

蘭更　蝶友　辭々　龍志　栖荷　如川　半路　崔賀　松嘉　耿水

世三段

い　も　徒　そ　の　や何　そ

世四段

い　も

せ

其角　芭蕉　芭蕉　千代　芭蕉　月下　深夢　半屑

專阿

世五段

徒そのやの何そ

いもも徒その

羽紅　良朴　鬼貫

白空　洒堂　明々

平岳　玉峯　龍順

枕風　冥宜

世六段

やの何そ

いもも徒その何そ

鬼貫　龍寿　蔦命

泥仲　ひとし　ひい

雅の西　芭蕉

雪の雪　千代　乗吟

蕉雪　ひい　吉雪

杉の葉　夢太

鈴酒の船　ひい　不来

宗因　大雪　塚の雪

舞ふ　鷹　丈叫

人ひい　雪の杉

芭蕉　仙蓑　萩　大雪

人ひい　何し　ひふ

跨山　肅志　ふふ

世七段

い	か	徒	そ	の	や	何

陽の糸を雲にわたす春の角　其角

む　め

刈ぬやあれは扇の小絵をうむ　其角
解きあの仏絵たちやむ胸の身　百里
古池やはなみをむ水のふと　芭蕉
春の夕の雪山　能順
春をうむ春の雪山　林鴻
春をうむ花の雲春杜若　且精
川端や猫のやとをむ琴の琴　琴石
ふるあめと何を茶にうむ法の人　琴風
千鶴ふ春をそつもれ付　其角
養を春に浴るあそ春めタ付雨　其角
る春を

世八段

そ	

世九段

い	も	徒	そ	の	や	何

親ふ春をふ山名のるかとそきん　正由
きのふちりくるふ又ちる世日子　色山
ふ春月やたちまちる高雲霧　銭芝
物称の夕りそかちる北河面　其角
海春やは柴湖の水の夢春ちる　芭蕉
冊海春やふ春ふ海ふ雪解山　雨色
引ふやは何ちまちる海春の味　其角
春春ふ春ちそちる色都雪　仝

む　め

くふちふ素付海春む蛍の雲　芭蕉
ひとり春ふよ紅春ちん梅の日　落梧
何と人の何ふふ出ちん一蹴り　去来

四十段

そ の や 何 そ

は ら ん 徒 そ

[illegible] 其角
芭蕉
其角
松風
智月
重五
一井
聽雪
仙阿
芭蕉

四十一段

そ

の も の 徒 そ の や 何

[illegible] 去来
越人
芭蕉
重五
芭蕉
蘿蔔
如琴
千景
龍足
其角
雲由

四十二段

そ　い　も　徒　そ　の　や　何

四十三段

そ　い

風志　任口　素法　唐糸　畔蹠　玄旨　芭蕉　空花　笠旭

菊守　露垂　文更　古来　貞義　尋順

も　徒　そ　の　や　何　そ

負外

乃の格

上ふいつるおとくのいかろ死のとまきのと二例ありいもてゝとゝとの
ふ屬へきのいかろくそのゆ何ま屬へきのいをゝとのやゆ何ま屬のを
第五の音かとゝをの云の猴のかまひまてそふかうあのあうくまの
とのふあをゝとのひてもあるゝくはゆるかういもてゝどあとみ

ふ屬のハなるふぬねのと堅のかゝひすてゐ又ふゐ通ふのなりか
ふものといふをゐ又ゆといひくゆゆるなり志ると云そ又ゐふ
といそんよういとりふのといつるかさかゐ〜ま志ら色ようき
うゆゐふゐのつるらにのといそるなり

擬きの

ハルと　まめ〜やくまゐ〜のいせ系う　利重
ハルと　そ日の木の間ゆ鶯る呂ゆ〜〜　重五
ハルと　大比叡やまそふ雲華の霞ゆけ〜　去来
アラノ　ゆく春やゆ町ら貴ゆ〜〜〜〜ま　匂雪
アラノ　市ゆきの

ハルと　馬いゆ毛牛いゆ日の野〜〜〜ゆ　杜國
ハルと　春の雪能を待つの歌〜〜〜〜　松風
アラノ　浮屋の蓑をゆ〜〜〜の秋の雪　文鮮

やの格

既ふかく春ゆや　蓑や春霞や　橋や　庵や　水かく〜や
大そらやそ〜ゆの山　かゝらきや久米のいそ橋　晴嵐や　湖や
あゆの絵のやや（結ゆ絵）を切るやとゆ〜ゆ橋ゆ多ゆ毛出の
やい云ゆ紀やそて何ゆ〜ゆ〜ゆて〜ゆよ紀やなり　宮殿や　ゆそ
きのゆ〜〜のゆゆ〜ゆ紀ゆ月や　ゆゆ〜ゆ〜ゆ　ゆ〜ゆ〜ゆ
何ゆゆゆゆのゆ〜ゆゆゆゆ　ゆ〜ゆ〜ゆ　ゆ〜ゆ〜ゆ
やゆそゆゆゆゆの月ひゆゆふゆゆて格ゆ〜て雑のやゆゆゆゆ

雑のやの正しき例

ハルと　ゆきゆ日やしけさゆきのゆゆゆゆゆ　荷兮
アラノ　ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ　智月
〃　ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ　越人
〃　山川や鶴のゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ　落梧

サルミノ　山陰し海へとゝくや夕日かけ　智月

、芭蕉葉ハ何になれとや秋の風　路通

、子や待ん余り雲雀の高上り　杉風

、子や泣ん其子の母も蚊の喰ん　嵐雪

サルミノ　宵の雨しるや土筆のもえしろ　闇指

、夕暮は鶯しるや酒ともし　水鷗

、かくまちて居る名も秋や女郎花　松風

、春雨や蓑につゝまん雉子の聲　洒堂

去畧せる例

ハルノヒ　一夜かる宿ハ馬かふ茶屋なれや　野水

アラノ　五月雨にかくれぬものや瀬田の橋　芭蕉

、旅寝してみしや浮世の煤拂　去

、あけぼのは春のはしめや胴ふくら　野水

サルミノ　雲雀なく小田に土持比なれや　珎碩

、立さわく今や紀の雁伊勢の鴈　沢雉

、さと柳のしたりや鯉のまことしろ　一啖

、あき人の小袖も今や土用干　芭蕉

ソラサルミノ　名月や梢の月や雨のくもり　去

、宵の雨しるや土筆のもえしろ　闇指

袖日記　梅わかなまりこの宿のとろゝ汁　芭蕉

サルミノ　笠しはやつゝきさつきのぬかり道　去

スミ俵　木からしや茶摘も嗅か財　去

かやうの句は深のやかとかゝゐ人もあるへしいかまもてふらんけん
あるらんにと深く味く句あまいのへまて鏡のやうなり

添めの句

ルビ 古池や 蛙飛こむ 水のおと　芭蕉
アラノ きさらぎ 山や 霞を 男ひよ 鶯を ながめて　冬文
、 遠海や 浪 ゆ ゆ 月 の 角 大 所　寂洞
ヒサコ 曙 ア や な ま ら ら 舟 の 角 大 所　正秀
サルミノ 杉 浮 や 樹 の こ と ら ま た ま き ら ら　夢良
、 ア ら や 夢 ら む う へ の 霧 ら 秋 面　元北
ス 俵 大 ら や て ら の 出 て ま ま 鶴 春　丈草
、 杉 ら け や 生 ま ま ま ふ 江 の 春 元　星東
、 仲 の ら の や 男 の 畫 き ま の ら 月 ら て き　嵐雪
、 な ら ら ら の や 石 ら ふ う ま ら ま あ き 鳥　其角
、 あ き 蔵 や 鶯 重 ふ ら け の 秋 の 風　元北

ルビ 杉 の 家 や 夏 き き ま ら 僧 と 秋 の 聲　風國
、 世 の 業 や 舞 ふ の 生 ま ま ら 若 夫　山峰
、 ア ら ら ら や ひ ら 氣 ら の け き の 秋　支考
いひけすて結ふや
アラノ ア ら や む ら や 秋 玉 の 年 秋 海　長虹
、 南 ま や ら ま ら ま の ア ら き に　元順
アラノ あ ら や え 氣 の せ ら 秋 迫 の ア ら き ま　重五
サルミノ 蛇 ら 繁 こ ま や ら 秋 の ま ら 麦　之道
、 年 や い ら 堀 ま ら ら ま ら ま て　紙人
ソ ま ら 嘉 の 解 原 ら き 秋 の や 異 き 彩　乙州
切ら や
語のとぢめふかくや有り

サルミノ　秋風の吹きわたりけり人の顔　不玉

、　一里はみな花守の子孫かや　芭蕉

、　芭蕉葉は何になれとや秋の風　路通

うき恋にたえてや猫の盗喰　支考

袖日キ　秋の夜ル海より出て赤坂や　芭蕉

アラノ　星崎の闇を見よとや啼千鳥　仝

むや

ちやハまつやとの[illegible]あり又かくあらむ[illegible]と[illegible]の[illegible]やあり

又ミせてやるきりやると[illegible]を添て[illegible]いへり

スミ俵　蓬莱に聞ばや伊勢の初便り　芭蕉

、　[illegible]　利牛

袖日キ　年の市線香かひに出ばやな　芭蕉

アラノ　かさらけの[illegible]や菊の[illegible]　其角

、　山桜[illegible]　松芳

句兄弟　さうぶ[illegible]の風の[illegible]　酒堂

サルミノ　首出して初雪見ばや此衾　竹戸

アラノ　落葉かく[illegible]　越人

や哉　やろり　やあり　やし　やね

アラノ　夕顔や秋はいろいろの瓢かな　芭蕉

サルミノ　[illegible]　嵐雪

冬の日　[illegible]　杜国

アラノ　行年や親にしらがをかくしけり　越人

、　連翹や[illegible]　胡及

サルミノ　[illegible]　其角

アラノ　秋のあやかしまるもいたきあるかな　傘下
　　永きうや雑炭沼もこまるふり　卜枝
　　、
芭蕉ノ　吹ものや達ゑ枯れ　人も行　圃水
袖日記　本かくしや歩みかまて　おつかうぬ　芭蕉
サルミノ　まつあやつ多枯のゆるるよ　むさきぬ　嵐虎

七部集大鏡云夕影やの句の注不此句て秋とかるるの風圃
松雨葉太康工既三泊松集評林句解金花傳袖日記ホ出て其
心得違る根元とのふい古哥取あるゆなり古哥ら秋哥ゑまい
此句をも秋とかるひしあるんん丈い只おやとてふて句の名ゑも抱
らも一逢よかるひ四とたるとゑ句は俳諧不服前夏の部まかるを
兼相とやのちん又金花傳ホ曰や哉の句法かしのかる有風雅の乃ホ
俳接とのふいあるかしゆまて去ゑ侍むるまいかるとらく名ホ紀
さに既ホ古今抄ホ曰く夕影や秋いと句を切て濃むへしく夕影ゑ
花と雖の実とのゑ秋の実ゑ別まて句情い雖のかしくまて紀

花の夕影も加くる雖小ゑるりゆくやとは秋やいうたるひのやと春見
云云何ゑ云みとるかるひとるゑとをまいまし秋いのろくの花まて
有ゑる侍哥ホ引あて たまかるていまとかるも又乃注ゑるり侍哥を只
一ゑるホとるかるゑの今ままいのろくの花ゑさくと過去も現在も
皆沿定ゑるゑ影のやゑくるひといゆるえのなり過去ゑるて去た
のをうたるふへゑんや侍句古哥を悟て夕影や只一のろホ白しろ
と云ゑ乃て去ゑる見ら秋ホゑまいのろくの雖ホゑるかと未来ゑて
うたるひし句なり眼前のやゑして未来ホ指ゑ哥ゑまいうたるひ也
見ゑて百年のまとゑひとまらまへし丈ホ哉の句法ホしのあらひのり
風雅の乃ホ俳接とのふ事いなしといゆるえは云稀ゑり侍歌連
俳乃とて法のゑ乃くのいなしを法を以て俳ゑるる俳接ゑりゑし
のゑるひとい俳事を元や哉の法い名所四係非紙軽撥年月日
人名二季合雑見ゑをはゆとて十ゑ通りの句まいや哉やけり
やなり等をゆるを巧ゑホなて句乃ゑらむへしさるゑるゑらゑせホゑ
るをとのゑる秘伝ゑり非发云十ゑ通りの句まいや哉やゑり等と
ゆるをといえを未ホしし丈ゑや哉ゑりゑとゑてゑとゑホしくゑ

國のならひなり玉の緒に云なけれのやとハ後世にハ只ちきひるに
しむ事ものこハあまくしさるにあらさぞ嫌しきことにもあのしろ然にも
何のきまあるにもこえたりてきへて／＼にふかゝく感せらるゝ附をく
息をこつく事なり又云なけれのやにハ下の結ひやにかゝまる
事なりしと有り　按するにゆ句も彰やしくといふべに僻もし
と感したるやにて此や歌息のやなるへし大旨に曰く是僻
やの句の法に是僻やハ名ものやなりゆゑに哉とて喩るなり
とあり玉の緒に云きてうらやふしとの里大なるやをしまの山か
つらえやなるの山さくらしあるや姨捨山さるかなや志賀のうら
あまくらのたぐひハ地名をとすねの時にゆゑかくやにてのと
いふに通へりこまいハ上と下との地名別になるを二ツならぶへて
いふすのおしらえ上なるハ広くして下なるハ其中にある地名なり
云云又おふ坂やいせの海や志賀の浦やなすふハやかくのをいひ
て下へ地名をとるさねざるも常のことなり　非友云へさゝ浪や志賀
の都ハあれにしを昔ながらの山さくら哉とさくゝなるやしか
是僻や矢も見え是にて迷ひをもちらさへし　又神妙や哉見

日やの句上にいふなけれのやなり初雪やの句初の字に眼を
とゝめ胸中をあらむべし次の句にハき日やしくとおかへし七懸し
おく息をつゝやふきに歌息なり下の結ひやにかゝるるなるなし
大旨に曰連翹やの句注に是又やなりの二字切にて歌数なり
日なり侍旅の一ツなり云云　非友云此句ハ連歌やと詠めのや
ふくま替の日とかゝりてけりとむすひたる事にをいなり歌数
なり日なりとてもてふまをいのとてのいぶまけべ一句をなさぬ格遺
葉に同しおちるといへる一りのを衣たつやおそ現と風をすへ
哉是なるとや哉やけりと二字にもいらるゝとまとふべからず

哉の格

哉の結ひハいもてぢちにとののかゝりあり其のや何　あすゝと
かゝまてハゝなにとむすぶてなし

ハルノヒ　楼閣寺かしきぬのハさくらさの那　李風

ミ俵　ありなけとなまれなし時雨かな　許六

も サルミノ 茶の湯とてつめたき日にも稽古哉 亀翁

て、 渡りかけて藻の花のぞく流れ哉 凡兆

アラノ 花のなく刀もさしてみたき代の雨 菓禅

ハルノヒ 麦の穂たちうつゝて別れ哉 越人

で 傘をぬらしで旦見る松の雨 舟泉

と サルミノ 鷲ゐ切て白根が嶽を行衛哉 桃妖

ふ ハルノヒ 花に埋もれて夢より直に死ん哉 越人

サルミノ さびしさに客人やとふまつり哉 尚白

と、 鐵しきの杉のいつきに月夜の雨 其角

知る人にあはじあはじと花見哉 去来

の ハルノヒ 山吹のあぶなき岨のくづれ哉 越人

、 傘もちて松ふく小路の中ぞかし 重五

し サルミノ 舟人にぬかれて乗し時雨哉 尚白

き ハルノヒ 蝶の羽の閉てゆかしき撫子の花 野水

き サルミノ 灸のかけ様のやゝ寝にくき秋の雨 探丸

る、 孫嫁の程なくあつる時雨哉 正秀

る ハルノヒ 蓮池のふかさ見ゆる清水哉 荷兮

たる アラノ よるとなく雲雀の声の舌入哉 長虹

ね、 樫の木の花にかまはぬ姿哉 芭蕉

體言の格

體言ハ體の體言と用の體言と兩種の體言あり用言ハ四種の用言を首めとしてすべて轉く詞をいふ體の體言ハ天地日月昼夜雲風草木鳥獸すべて轉用のなき語をいふ用の體言ハ霞カスミ四段宿ヤドリ四段戀コヒ中二段恨ウラミ中二段かくのごとく四段と中二段ハ五十音第二

音イキシチニヒミイリ井を以て體言となり水流ナカレ下二段
霜枯シモカレ下二段かくのごとく下二段ハ五十音第四音エケセテ
ネヘメエレヱを以て用の體言となるなり體言の辞にてハ
ハモ徒のそのや何々とかゝりても結ひにかゝはらぬ此體
言にて結ひとするときハ皆結ひとなるなり

ハ　サルミノ　蕗の芽とりにならぬ藁のかよひ道　凡兆
、　サルミノ　常斎にはつれてけふは[illegible]　千那
も　スミ俵　雪の松おれ口みても同じ事　野坡
　　サルミノ　冬の[illegible]けの[illegible]　乙州
て　ハルノヒ　背戸の畑菜に[illegible]蟷螂　旦藁
　　サルミノ　襟巻に首引入て冬の月　杉風
、　サルミノ　蛍火や吹とばされて鳰の闇　去来
　　スミ俵　[illegible]かしこまりてき[illegible]　嵐雪

、　　[illegible]砕く雲の峰　李由
を　サルミノ　蛸壺やもろく[illegible]麦の丹　芭蕉
、　スミ俵　いそがしき[illegible]か[illegible]　洒堂
ふ　サルミノ　[illegible]の野や浦の[illegible]　凡兆
　　アラノ　あつ[illegible]を[illegible]蟋蟀　越人
と　サルミノ　[illegible]秋の[illegible]　重角
　　アラノ　[illegible]　荷兮
の　ハルノヒ　[illegible]　杏處
　　　[illegible]の一つ[illegible]　越人
そ　サルミノ　[illegible]船の中　其角
、　　[illegible]秋[illegible]　曽良
　　スミ俵　[illegible]嬉[illegible]　智月

も

ス三俵　杉の木も門徒坊主の手を組ひ　活圃

ちまはりて女と　落梧

サルミノ　神垣に羽蝶とまりぬ　荷兮

アラノ　朝日さし中々ふかく　智月

ス三俵　ほと蛍の中に虹に枯れて　芭蕉

ふ

サルミノ　蝸牛角ふりわけよ須磨明石　芭蕉

ス三俵　ゆきぬれし花ハ時雨の庵　斜嶺

アラノ　舞ひ込ぬハ月の下　野水

よ

庵の月も見まぬ　素堂

、

ス三俵　暁のめをさまさせよ蓮の花　乙州

そ、

雪の日に處なきそ鵆鶴　依々

二ッのぬの格

釣		住		逢	打	押	飽	
ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
ヰ	リ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
ウ	ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
ヱ	レ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ

（不のぬ（早ぬ

（早ぬ
ふのぬ

（此二音の早ぬハ詞の八チマタ四段ノ活を云く但シ一段ノ言中二段ノ言下二段ノ言ハ第四ノ音と同しく不のぬと早ぬともなるなり

第一の音よりかゝるあのぬなきぬくるぬなとゝふのぬといふ切字ならもせぬう
第二の音よりかゝるあ経ぬなしぬうちぬなとゝ早ぬといふ切字なり
第四の音よりかゝるぬハ早ぬふもふのぬにもなるなりぬの字の下ふるの字を添へきこゆるハ早ぬなりぬのしたふるの字付られおしてぞふかゝふぞふのぬといふなり

早ぬ

ハルヒ　君か請の杉とハ見きぬ心代の恵　利重

去来　尚白　元北　野萩

百歳　黒東　豫雑　尚白　至曉　亀翁　野水

不のぬ

三ッのしの格

現在　あるし　遠し　近し
未来　へし　むし　まし
過去　有し　思ひし　ゐし　詠し

（ハ二ッの現在と未来の
しハ切るなり
ハ過去のしハ切るなり）

現在の

ハルノヒ　霞のかすみかすみかすみく抜るし　羽笠

サルミノ　井のもとかふかるし清し　杜若　半幾

スミ依　庵子の庭掃てしし春の雲　其角

未来の

サルミノ　移しかし　ちふ仏し　祚の旅　芭蕉

アラノ　岸の雲おし　ハ出もせしらへし　野水

過去の

サルミノ 我まゝと鍬のふけし根芹かな 丈草

、 石山や行かで果せし秋の風 羽紅

重ぬる手尓を葉の格

袖日キ 抜柳さしも若衆の〳〵女郎〳〵 芭蕉

、 秋や〳〵須磨〳〵須磨や秋知る須磨の秋 仝

ソコサルミノ 聲たてゝ猫活や〳〵此方や〳〵やつくし 苔蘇

アラノ 見よしくと揚や〳〵つゝきやつくし 其角

サルミノ うら錐も〳〵衣〳〵の内 芭蕉

古今十三 月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身ひとつはもとの身にして

新古今十七 天の川かよふうき木にことゝはんもみちの橋はちるやちらずや

千載十二 あふのはやのぱやいつかたに埋もれの香しとまろし梅もへすらん

古今二 誰こめて春のゆくへもしらぬまに待し桜もうつろひにけり

二重に調ふる手尓を葉

アラノ 鴫の音も結ひえふりあらしかくまゝう 路通

、 鳥もや海はおちかゝれ山もあれ 去来

、 扇舟は秋よりふかりぬ長き哉 冬文

サルミノ ひややかん〳〵の舟も〳〵ん 嵐蘭

出るより上へ帰る手尓をは

スミ俵 「春や祝ふ丹波の鹿の帰るとて」 去来

つゝ

てにをはふゝてあり〳〵らふかよふゝてあり半ふなるつは結ひふかゝらぬつゝのかゝれはもてでを中となりその[illegible]何とかとかりてつゝと結ふ例なし

証句は[illegible]

てにをはを誤りたる句

ハルノヒ　萱草ハ随分暑き花のいろ　荷兮

サルミノ　鶏の声がきこゆる山ざくら　凡兆

夜神楽や鼻息白し面の内　其角

夜かぐらやの句鼻息白さとあるを白しと書あやまりてあまり五元集には白さとあり此五元集は其角の自らかきたるをほりうつしにて彫らしたる書なれば是正しく白さなるべし又鶏の声もハ声ぞのあやまり又萱草ハハのの書あやまりなるべし

変格

てにをはハ上にそのや何等の辞をおかずして留るつゞけるせざるぞゑの如過去のにて結ひて定まれる格なきをあからてふをうつすのとゞのはさるとは叶えぬ句を変格としてここにいだせり

サルミノ　桐の木にうづら鳴なる塀の内　芭蕉

、　菜むしの葉の色にうつりけり　猿雖

冬ノヒ　ちるつゆのこほりても待て帰る　野水

アラノ　ねむるとうるはるのしぬ菫草　荷兮

、　行まちをあふこふ人とせしける　野水

古今集ありよしくありけりのたくみにも種々やうる信じなりにおかる新古今集も須ての関をさゆかぬ浪の音となひさらしてかゝらく続拾遺集もめうのありし刈さしかなのうつりき秀てくさとひかる源氏ものがたりをかゝりひかる節用にまさへきるはかまえくさられ玉の緒にも上件の哥とらるまでも皆終りの句に歎息の意ありて留られぬつ秀りくりせりるこえにて結びてはあへりてよろへしからそよく下ふく枝又よる文に辞を加へて味ある意ありての如く定まりの如く味ひをうるべし云云　変格ハ右のごとある味のひらるこゑにてき味ひをうら心ふよくきとらえなる堪能のうふくたゆいくすかある

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いひのとそをふと葉

ハルヒ　舟しくの小枝ふ来の紙り　けり　且薫

スミ俵　黒こ　仲の守石のいき　ふ　丈艸

十三段の　ク

神書　ホ　正月い梅の色さ　芭蕉

ク　ク　か

物をのひとろる詞なるあい歌く須あり

新式　まこ　ふつく春ろけり　ふ白くさね　定重

せり

万葉集　爲有と書り

新式　山のろも　ろをよ　せり　秀の浦　立圃

たり

ろりいとありとのふとのつゞまれル詞なり俗ホラアル、テキルホとのつふ

あくまり

スミ俵　枝の色とのへの枝ホ　ふ　其角

ろり　ろり紀よふりの張ろり　秀紙　環　二水

サミ　海常の色ハ満たり　歌ろ紙　月　魯帆

ろ　ろ　海粉もあとしい月ふ　ろ　たり　里圃

あり

存在の義なり　ふ　ふ人ハあるやなりやとのマメデキルヤとのことなり

サミ　掃ろく人の　ろ紙　情ろ　あり　露沾

ろ　ろ　姿ろふ　ふ　ろ　ろ　ふ　ろ　の　書　芭蕉

なり

ふありのツゞまるこ　ふ　ろ

いひのとをふと葉

アラ　梅もうつくゆうたう　蜂の　聲　昌碧　野坡

スミ後　梅の哀　和もうつら　過てあるまたなり

、　食堂ホ　蔭　ゝ　対　面　支考

松の　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　空

サヒミ　いとゆかのいとあるゆ　虚　木　立　水　固

、　弥　和　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　去　来

ん

こゑ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　俗語ゆいウ

ヤウなといふものなりなるゆ「うんとゆ」見ヤウ「きうんとゆ」ハキカウ

とゆうこゑあり

サヒミ　ひとうゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　去　来

、　葉　月　や　矢　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　千　子

ヒミ　月　ゆ　せ　ん　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　去　来

スミ後　蒙　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

いひのとそをふと葉

[illegible]

ら〜

いも徒のそのや何ら花のつまの結ひみるあるいらーのそふて他の辞すいかなるとあるらんい大きりらーいい小キと心得て疑の大キいと小サいとなりのへーらーい第三の音うくもつぬふむゆるうゐのくやまけふこえてなどて第四の音ふつとふ

北三ノ 鱗 沼るひもあるらーー 鱗はり 半殘

くらーー

くらーーい万葉集三巻下と書りらーの反レりあるけりと同じけりくるくるのまたらるなり仍てらーとの人句とひとつふふ沼なるくらーー

アラノ めくるあるーもよりまふくるくーー 生活魂 野水

北三ノ そのくるくい名花なるけるーー 小夜砧 芭蕉

なくらーー

あくらんくーのつまりたる句とふ沼て大方まくるーー

アラノ 寒をとそとそもとそよ濁まぬ居ふるーー 素堂

くらん

くらんいと方デアラウカとの人句とふ沼てよ濁ーー又古風まいからんとの人心のもあり又今の人い給ふとの人詞の所をけんとも云つりけいふいい早竟くくくくくくもる句ようう元来くくるとの人へき事なるからまきーくくくまくくくぬるるあるゆるふんとふあり

神日キ 猿蓑 いまてを出くらん まつ 鍛 芭蕉

アラノ まとしーーと山やくくくらん延さくくら 一 鍛

もふーー

もふーーいもとふーーと二つなくもいい合まる意のもなくもいふつふそい

いひのとをとふと葉

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いひのとそをふと葉

これも茶ふかるゝ

アラノ　落ちるをかしく月はつゝねもあるまじき　拭人
サルシ　むさんやるかふるみの下れまりしくそ　芭蕉

ふ

ほとゝぎすのあるもあるとは俗ものゝ　メツサウナ　あるとゝ人ゝ中も
らもなるくしくなるまとゝとゝるのつふ同ド　但ーまとゝふ
かゝるあり

アラノ　二タみもねるゝいせーふ　花の雪　芭蕉
サルシ　ぞるゝやし解ゝ　雪　米　ふ　立

ふそ

なとかゝるそ結ふなるそのを雪をまぐりてそとゝもむぐるゝ
そへあるまとゝふとゝるのそたり

新式　八月の俳ゝるをあるせゝ　花の面　立園

神キ　雲ふ流ふ落ーゝそ　むらひる　芭蕉
、　花よ　あゝふ　試ふゝひそ　左蕉　立

う

ゝるゝひいがとやゝの二ゝ人ゝうの要とのゝでかいあてゝる
ふのふりやいかあひゝるゝなるゝ雲ゝ山いあらまゝふゝるゝ山ゝ角
ヘリタルカとあてゝるゝるゝ人ゝの少神ゝるゝや古月行ー
モヤスラント思ひやらまゝるなるゝ又云ゝやゝともふ鯨のてふゝい
あゝら鯨の下いゝ上いやゝるゝいゝたゝるゝ人ゝがあゝるやい
つゝ都やゝのゝら古きゝ茶ふゝるゝたゝひの上ふつゝふいやの茶て
やあゝるふいがの字なゝるけゝ

アラノ　茶ゝ中ゝてらおもゝしゝるゝ茶ゝるゝの夢　芭蕉
サルシ　雪ゝとゝも茶のゝ茶ゝるゝ家ゝの海　路通
、　幾人ゝるゝしゝまゝるけゝくせゝるゝ　太茶

[illegible]

アラノ　[illegible]　[illegible]　[illegible]

いひのとせをふと葉

袖日キ　あをを人ゝこゝも云ゝ　あをすす　松の葉　芭蕉
花ヒノ　雲の華　今のい比扇ふ仰ぐものゝ　之道
アラノ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　二ゝの春の咲ちるゝ　荷兮
茅生ノ　首の陰いのつゆのちるゝのけゝ　木節

や

ゝゝと云ゝ同一　景色ハ歌をゝやとゝもゝあり

新式　ひゝゝゝゝやゝ　ね花をゝゝ　ゝゝ　貞徳

ゝ

ゝ俗ふかハと云ハ信ふ　サウヂヤナイ　とゝゝ俗ゝゝゝ外ゝ古言ゝゝい
彼者とゝふを　かゝとも云へり　又のゝかゝと云ゝゝも云へり

新式　ゝゝをゝゝ　人ゝ人ゝゝ　ゝゝ　ゝゝゝ　望一

やい

ゝゝゝゝ

いひのとしをふと葉

神日本磐余彦の御代より今に至るまで

いねゝと人よいとまつ春の雪　路通

上

こまつにさせまかうせまかうせまかう

いひのとも葉

スミ依　ひいよりも毛ものうらうら　赤坂　宗雲

禮キ　馬くくに花ぐし叶ふの　大井川　芭蕉

へ

へーとい俗信ホサウナとの小河ののとくとのをとをまかりくく
いの河あり　をるぬへーとのいいのくをるぬホをるくく紀勢ひの
をまかりあてのの河なりおちるへーとのいいのくをちちまるむ
のちくき勢ひあるをまかりてのの河あり

マラノ　雖よりくくをもあるへーー　衣うへ　荷兮

、　岩の雲おーいあもよーうへ　野水

ムルミノ　白雲のーーうき場もつきのへーー　山峰

俳諧あまを世鏡終

知　学　大　図　書　館
#1183
受入
36.3.

明治十八年五月四日　版権免許
同　廿三年八月　版権譲受

埼玉縣
編輯者　田口竹友
武蔵国入間郡北入曽村一番地

東京府
発行者　水落忠次郎
東京市京橋区南傳馬町二丁目五番地

発兌所　目黒十郎支店
仝　〃　丹